物語の守護人

正場 康広

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

物語の守護人

【Nコード】

N6867J

【作者名】

正場 康広

【あらすじ】

この世には沢山の物語が溢れている。人はそれを文字に置き換えて紙に書き、それを綴じた物を本と呼ぶ。

人の一生、知識などの事実を著したのもあれば、頭の中から生み出した世界を著したものもある。

前者には終わりがあある。しかし、後者にはない。生まれた世界は本が終わってもなお、続いていく。

これは物語を紡ぐ者、それを読む者、そして守る者の話。

そしてまた、これも世界に溢れる物語の一つである。

序章 仕事はいつも大変

薄暗い建物の中、二人の男が向き合っている。

彼らは、面白いほど対照的だった。

片方の男は、ファンタジー小説に出てくるような、甲冑と鎧兜に身を固めている。手には重々しい剣を構えていて、筋肉で引き締まった身体から、歴戦の猛者であることが窺える。

しかし息は荒く、その鎧はひび割れ、身体の至る所から血が流れ出ている。

もう一方のほうはというと、黒いスーツに身を包み、美しい鍔の形をしたレイピアのような剣を持っている。

少し癖のある髪の間、銀縁の眼鏡、だるそうな目。

それも、片方の男とは正反対だった。

その鎧の彼が口を開いた。

「なんでだっ…俺は『覇神』グリードー・グレッグだぞ…」

「ああ、知ってるぞ。ダガラの戦いじゃ武勇を奮いに奮ったみてーだな」

「この王国には、俺を越える剣士など存在しないはずだ…っ！」

「まあ、そらそうだろうな」

傷付き、倒れそうになるのを堪えながら、彼はさらに質問する。

「どういう…ことだ…」

黒スーツの男は答えた。

「ここじゃないところから来たから」

「何…？」

男を見据えながら、訝しげに眉をひそめる。

「ま、平和な日々を享受できなかったあんたが悪いんだよ」

「何だと？」

黒スーツが言ったその一言が、彼の堪忍袋の緒を切った。

「俺は戦乱の英雄だった！！それが戦争が終わり、世界が平和になったとたん、世界中から軍隊が廃止された！！！」

彼が息を荒げながら怒鳴るのを、黒スーツはげんなりした顔で聞いている。

「俺は戦いが好きで軍隊に入った！なのにその戦いは無くなっちゃまった！！だから俺は自分から戦いを作った！だが警察隊と戦っても相手にならなかった」

彼の目が狂気じみて、ゆっくりと口角が上がっていった。

「だからテメエには感謝しねえといけねえなあ…お前も感謝しろよ？…この俺に殺されるんだからなあ！」

黒スーツは呆れたような顔になって言った。

「とうとう頭までイカれたか…」

「供養ぐらいはしてやるぜ！ヒヤハハハハア！！！！！」

大柄なその身体に似合わないほどのスピードで間合いを詰め、胸に
対し平行に構えた剣を突き出す。

「はあ」

黒スーツのため息。

グリードーを右手の人差し指で指す。

そして、静かに言い放った。

「逆回転卓<リターンテーブル>」

ドスツ。

黒スーツの胴体に、大剣の刃が深々と突き刺さる。

グリードーの顔がにやけた、

のは一瞬のことだった。

同時に、彼の背中から血塗られた剣の先が飛び出した。

「…カハッ」

「ほら、さっさ剣抜けや」

黒スーツがグリードローの腹を蹴飛ばす。

剣を握ったまま、巨体は後ろへ吹っ飛ばされる。

その反動で剣が黒スーツから引き抜かれると、グリードローを貫いていた刃も、身体に吸い込まれるように消えた。

「直接手エ下すまでもねえわ」

黒スーツが倒れたグリードローに近づく。

「…何…を…した…」

黒スーツは笑った。

「さあ、何をしたんだろうな」

彼の息が途絶えた。

「時間はできたんだ、ゆっくり考えたらいいさ」

レイピアを拭い、剣先を床に向ける。

「グリードロー・グレッグ。酒屋にて酔ったところを暗殺者に殺される。犯人は行方不明」

「物語転換くストーリー・エクステンジ」

床の下から白く光る活字が現れる。

その文字の配列が変わり、また床に吸い込まれていった。

「あゝ終わった」

再び抜いた剣で空を切る。

光る筋が現れて、ゆっくりと左右に拡がっていく。

「さて、帰るか」

黒スーツは光の中に足を踏み入れた。

お一人様ご案内。(前書き)

物語をお楽しみ下さい。

お一人様ご案内。

市立赤谷東高校。ごく普通の公立高校。

そんなどこにでもある学校の図書室で、女生徒が読書をしている。

日の当たる特等席に座り、リラックスして読む。

これが彼女・白羽 智穂くしろはね ちほくの読書の方法だった。

「あはははははっ!!!!!!」

静かな図書室に突如響く彼女の笑い声。

小刻みに揺れる体と一緒に、長い髪も揺れる。

書庫から司書が顔を出す。首から提げたネームプレートには、「高梨 哉子くたかなし かなこ」と書かれていた。

「あら、あんたまたここにいたの？授業中よ？」

「あ、見つかつちやっただ？」

「見つけるも何も隠れるつもりないでしょ」

「ばれた？」

ペロッ。

舌を出して悪戯っぽく笑う。

「かわいいこぶつても無駄よ。あなたの本性分かってんだからねえ」

「エエー、なんか怖いー」

「それに学生なんだから勉強しなきゃダメだよ」

「だってえー」

「だってクソもないよ！。この時間は大目に見てあげるから、チャーム鳴ったら教室帰んなさい」

「…はい…」

高梨は子供を叱るような表情を崩し、微笑む。

「…で？何読んでたの？」

智穂もにやける。

「知りたい？」

と言いながら、高梨に向かって本の背表紙を向ける。

『土佐日記』

「…あんだこれ読んで笑ってたの？」

智穂は意気揚々と答える。

「え？だって、あざねあへりとか言っちゃってんだよ？！海なのに、海水なのに、腐るとか言ってるんだよ？！もう笑うしかないでしょ！」

やべえわゝ、マジ紀貫之パネエわゝ。

そんなことを言いながら、彼女はまた肩を揺らして笑う。

「…まあ、屋上にたむろってるやつらよりマシか。あんたはいい不良だよ」

「不良に良いも悪いもあるのー？」

「まだマシな方ってこと」

智穂はふうん、と曖昧な相槌を打つ。

キーンコーンカーンコーン…

「あーあ、鳴っちゃったかあゝ…」

彼女が残念そうに言う。

「次の授業には出なさいよー」

そう言って高梨は立ち上がり、カウンターへ向かって歩く。

バタバタバタバタバタ…

廊下から、何かが走ってくる音が聞こえた。

「…?」

二人が怪訝に思っているうちに、凄まじい勢いでドアが開いた。

「バアン!!!!!!」

「智穂いる?」

肩で息をし、顔を紅潮させた女生徒が尋ねる。

「あ、アスカじゃーん」

「いたあ!!!!!!やっぱりここだったか!!!」

友人の怒鳴り声に、思わず智穂はたじろぐ。

「な、なによいきなり…」

「次!!!!!!音楽!!!!!!あんた、出るって言った!!!!!!」

「…図書室じゃ静かにね」

高梨の注意が入る。

「す…すいませ…息…絶え絶えで、大声じゃないと…喋れない…」

机によからないと立っていられないほど、サヤカのゼエハアぶりは

酷かった。

「サヤカ…大丈夫…？」

堪らず智穂が声を掛ける。

「私のとあなたの荷物持って、教室から一番遠いここまでダッシュで来たのよ…」

サヤカは半ば恨むような視線を向けた。

「え?!マジで?!持って来てくれたの?!ありがとうー」

しかし、当の本人はその視線を全く気にしてはいなかった。

「ほら、時間無いから行くよ!!!」

サヤカが駆け出す。

「え?!あ、うん!!」

智穂も駆け出した。

…が、その足はすぐ止まってしまっ。

「…?」

見つめる先。

そこには、本棚に差し込まれたまま、ぼんやりと白く輝く本があった。

「ねえっ!!!」

ドアから顔を出し、サヤカを呼び止めようとする。

しかし、彼女はすでにいなかった。

「ねえ、なんか光ってる本があるんだけど……」

カウンターの高梨に尋ねる。

「あれが見えるんだ!」

と、興味津々の返事が返ってきた。

「さあ?自分で見てみるといいかもよ?」

高梨に促され、忍び足でそれに近寄る。

近寄る程、その本が光っているのは目の錯覚ではないことが分かった。

そして今、自分の目の前にその本がある。

「え、マジで? ふえ?」

本のタイトルは、「ガルダ戦記」。当分前に完結したライトノベルで、一度読んだ事があった。

それを手に取り、開く。

「え?!」

全てのページが、白紙だった。元からそこに活字など無かったかのように、綺麗な紙が綴じられていた。

「…どうなってんの…?」

本はまだ輝いたままだ。呆然としてみると、開いたページに文字が現れた。

『本を閉じて床に置け』

「え?」

いきなりのごとでどうしたら良いか分からず、戸惑う。

するとその文字が消え、また新たな文字が浮き上がる。

『もたもたすんな!置きやいいんだよ、置きや!』

「なっ…そんな乱暴な言い方ないでしょ!?!」

そう言うてから、本に話しかけたことに気づいた。

「何言ってるんだろ、アタシ…」

『いいからさっさと置け』

「うわっ?!本が話してる!!!」

返答があつたことに驚いた。

「え???何???アタシ、頭おかしくなっちゃったの???」

半泣きで混乱していると、また本が怒った。

『お前の頭のことなんぞ知らん!いいから置け!!!』

「わ、分かった…」

今度は素直に本を床に置く。

すると、本が‘立った’。

「うわっ???!」

そして、文庫サイズだった本が大きくなり始めた。

ミシッ、メリメリッ、バキバキバキ…

智穂は異常な音を立てて変わっていく本を見ていらねず、両手で目を覆う。

バキン…

音が止み、ゆっくりと目を開く。

そして、自分の目を疑った。

目の前にあるのは、何百年の時を過ごしてきたかのような、古びた木の扉だった。

「え…？」

好奇心に駆られ、ドアノブに手をかける。

鍵はかかっていなかったのか、すんなりと開いた。

「うわっ」

扉の中は、強くて優しい光に満たされていた。

それは、光の布のベールが掛かっているようだった。

「スツゴイ…」

智穂は目を輝かせながら顔を近づけ、中を覗きこむ。

ゴッ…!!

「ぐっ」

「ぎゅ」

智穂の短い悲鳴と、知らない男の声が重なった。

「痛ったあ……」

智穂がぶつけた額をさすっていると、男の怒声が聞こえた。

「見ず知らずのドアをノックも無しに開けて中を覗き込む奴がどこにいる！……！」

智穂は怖ず怖ずと頭を上げる。男は癖の強い髪、銀縁メガネ、やるきの無い目、そして見ただけで高そうだと分かる黒いスーツを着ていた。

「そつ、そんなこと言われたって……中が気になったんだもん……」

「そんなこと知らん！！こっちだって覗きこんどる奴がいるとは思ってない！！……」

二人のやりとりを見かねたように、高梨が声をかける。

「あのさー、図書室は静かにしようよ。で、今回の仕事はどうだったの？劉ー」

智穂は、高梨が男のことを名前で呼んだことに嫉妬する。

「アタシ、『あんた』としか呼ばれたことないのに……」

しかしその眩きは、どちらの耳にも届いてはいなかった。

劉一、と呼ばれた男が答える。

「名前に（グ）が多い奴だったよ」

「あ、そう。で、どう処理したの？」

「抹消。暗殺者<アサシン>の仕業にしといた」

「あんたそのやり方好きだねー」

「犯人が誰か分からなくていいからな。すぐ行方をくらましたことにしとけば」

智穂はキョトンとしてその会話を眺めていた。

「あー…さ、」

彼女はためらいがちに発言する。

「さつきから、何言ってるのかわかんないんだけど…」

「理解できないか？」

劉一が問い掛ける。

教えてくれることを期待して、智穂は頷く。

「なら、それでいい」

そしてズツこけた。

「…へ？」

「知らないなら、知らないほうが良いって言ってるんだよ」

「ケチツ！教えてくれたっていいじゃんかあ！！」

劉一は相手にしない。

智穂はむくれて拗ねた。俯いて、頬を膨らませる。

「…ニヤリ」

「…？」

「スキアリーブ！！！！」

目にも留まらぬ速さで、劉一の胸ポケットから、何か、を盗った。

「…！！！！」

劉一の顔色が変わる。

「なにこれ？キレイだね」

‘それ’は西洋の細身の剣を象った、レターカッターのようなものだった。鍔には凝った装飾がされていて、相当高価であることが窺える。

「へっへー、アタシは文系少女だけど、瞬発力だけは自信あんのよ
ねー。返して欲しかったら…」

「今すぐそいつを離せッ！！！」

劉一は怒鳴り声を上げ、智穂に忠告した。

しかし、それはもう遅かった。

呆気にとられている智穂の掌の中で、小さな剣が光りはじめる。

「うえっ？？？」

輝きはどんどん強くなり、智穂を飲み込んでいく。

「ちよっ…これ…」

あまりの眩しさに、智穂はますます混乱した。

「高梨ッッ！！！！」

劉一が叫ぶ。

「どうしたの？」

呼ばれた高梨が、カウンターから走ってきた。

智穂の様子を見て呟く。

「これって…やっちゃった？」

「…ああ。証を盗られた」

「ってことは…」

「ああ、立会人宜しく」

「…はあ…」

額に手を当てた高梨が、智穂に向き直る。

その手には、いつの間にか分厚い本が握られていた。

「聞こえてるよねえ？」

高梨の問い掛けに、智穂はしどろもどろになりながら答えた。

「聞こえてる！！聞こえてるけどこれは何?!このブアーとした光は?!」

「あんたが証を盗っちゃうからだってえ。実はね、このままほっとくとあんた死」

「聞きたくないッ!!!」

半泣きになりながら反論する。

「…とにかく、先生に任せときなさい。剣を胸の前に当てて」

「じじ…?」

自分の命が掛かっていることを知ってしまった智穂は、今までに無いほど迅速に行動した。

「そう。そのまま動いたり、声出したりしちゃダメだからね」

高梨は本を開き、文言を唱えはじめた。

『白羽 智穂、齡十六。‘守り手’鋼内 劉一の認定により、‘観察人<ルツカー>’高梨 哉子の立ち会いの下。』

一呼吸置いたあと、最後の一言を厳かに告げる。

『守り手<セイウ>‘アー’に任命する』

その一言を言い終えた瞬間、小さな剣が智穂の胸を開いた。

智穂は驚きに目を見開いたが、声を出さないという言い付けは守った。

胸に突然出来た穴から、小さな紙のような物が飛び出す。

一枚だけでなく、何枚も、何枚も。

それらには、智穂の過去の思い出が映画のように映し出されていた。

「…」

自分で思い出すことが出来ない程、古い思い出もあった。

「はぁあ…」

声にならない、ため息が智穂の口から零れる。

紙に映像として映し出されていたそれらが、文字に変わる。

そして、智穂の前で重なり始めた。

バサバサバサバサ…

『製本作業<ブックメイカー>』

劉一が呪文のように唱えると、宙に浮いている紙の束に表紙が現れた。

「その本を手にとって」

高梨が促す。智穂は言われたとおりに本を手取る。

智穂を包んでいた光は、本に吸い込まれるように消えていった。

「ふうー…」

高梨は安堵の溜め息をついて、智穂に労いの言葉を言った。

「お疲れ様」

キーンコーンカーンコーン…

「あー、音楽出たかったなあー…」

半分放心状態の智穂は、うわごとのように呟いた。

劉一が口を開く。

「授業サボるんなら、ちょっと話を聞いてもらおうか。俺達についての話をな」

そして彼女は足を踏み入れる（前書き）

3ヶ月。お待たせしました。待っている人がいれば、の話ですが。

（笑）

これからもよろしくお願い致しますm（――）（m

そして彼女は足を踏み入れる

バツ。ダダンツ。

智穂は椅子と机を踏み台にして、高く舞い上がる。
そして。

「とーっ」

ゴスツ。

鞭のように放った彼女の跳び蹴りは、劉一の顔面にクリーンヒットした。

「へぶう!!」

劉一の身体は綺麗な放物線を描いて、

ゴオン!!!!!!!!!!

痛々しい音とともに、貸出しカウンターの後ろへと吸い込まれていった。

その様子を見ていた高梨は抱腹絶倒していたが、その音を聞いた瞬間顔色を変えた。

「ちょっと!!!パソコン壊してないよね?!!」

「先に心配すべきは俺の状態だろうが」

不機嫌な表情を浮かべた劉一が顔を出す。鼻からは、一筋の血が流

「…俺達守護人<セイウ>、アー>になる条件は二つある」

突然、劉一の話す雰囲気が変わった。

智穂は緊張して話に聴き入る。

「一つは、守護人から証を受け継ぐこと。俺の証っていうのはこれだな」

先程しまった小さな剣を再び出す。

「でもっ、アタシは受け継いだわけじゃ…」

「話は最後まで聞け。二つあるって言っただろっが。もう一つは…」

劉一は剣先を智穂に向ける。

「…ッ」

小さな剣のはずなのに、智穂は喉元に刃を突き付けられているような恐怖を感じた。

紛れも無い、死の恐怖。

「証を強制的に奪うことだ」

「…」

智穂には心当たりがあった。

「あ」

「証を一度でも手にした以上、守護人の力は身体に流れ込む。人間の身体を保てないほど強いエネルギーの塊だ、ほっといたらお前は消えてた」

「…だけどアタシは消えてないじゃない」

「だから言ったる」

劉一は自分の胸を押した。こうしろ、と言っように。

「…」

疑いながら、智穂はその通りにする。

ズボツ。

「-!!?!?!??」

「人間なら身体を保てないんだ。人間じゃなけりゃ消えないんだよ」

劉一のその言葉は、智穂には届いていない。

彼女は、（自分の腕が肘まで身体の中に入った）という事実を驚いていた。

しかし、服を突き破った様子は無い。

さらに、肘まで入った腕の先は、背中からは出てきていない。

「へっ?」

固まる。パニックを起こし過ぎて、今の彼女は限りなく冷静になった。

そして、あることに気付く。

「…なんかある」

棒のようなもの。重さはあまり感じない。

「引き抜いてみる」

ゆっくり、恐る恐る腕を抜いていく。

手首が見えたところで、

「ええいつ!!」

智穂は一気に引き抜く。

そして目を見張った。

手にしていたのは、一本の雑刀。立派な造りになっていて、銀の柄には十字を象った紋様がある。

その刃は純白に輝き、神々しくさえある。

「…すごい、キレイ…」

「アンタの証よ」

高梨が言う。

「これが…」

そして、智穂は恍惚とした表情のまま、素朴な質問を口にする。

「…で、守護人って何？」

しばしの沈黙。高梨と劉一は、一番大事なことを伝えていなかったことによく気がついた。

「ん…まあ、座ってゆっくり話そうよ」

「え、でも授業」

しー、と高梨が指を立てる。

「時間は止めてあるから」

そう言われて、智穂は高梨の指差した場所

- 時計を見た。

長短二本の針は、先程の始業のチャイムが鳴った時刻を指したまま止まっていた。

図書室内の閲覧室。

普段は自習をする生徒が占拠する部屋だが、授業中に来る生徒も無く、がらんとしている。時間停止中ともなると尚更である。

「簡単に言うと、守護人っていうのは力をつけ過ぎた登場人物から、物語を“護る”ためにいるの。だから本の世界には行き放題！」

「ホント?!」

異様なまでに智穂は目を光らせる。

しかし、

「でもね、」

諫めるように高梨は続けた。

「その世界を必要以上に歪めることはしちゃいけないの。他の誰かを死なせたり、筋書きと違うことをするのはいけない」

ここで、高梨は智穂から出てきた本を持つ。

「あと、これはアンタの“命”だから、絶対に傷付けたり、汚したり、燃やしたりしないように」

「...?」

智穂は本が命であるという説明を理解出来ない。

「これが残っていれば、アンタは死なないし、身体に傷も付かない。でも、これに着いた傷は全部アンタに返ってくる」

「はっ?」

「解りやすく言うのだ。その本の角が折れればどっかの骨が折れ、ページが破れるとどっかの内臓が破裂する、ってことだ」

「へえっ?」

劉一の補足に智穂は青ざめ、自分の肩を抱く。

「アハハっ、劉一、怖がらせすぎ」

「笑い事じゃないよねえ? ちょっと、大事にしてよっ?!」

アハハハハハハ、ハハッ、ヒッ、

「ちょっと! 笑いすぎじゃないの?!」

高梨はまだ笑い止まない。智穂の目には少し涙も浮かんでいる。

「だって! 嘘ついてんに本気で反応するからあ!」

「なあんだ…」

「まあ表紙折ったら頭蓋骨は折れるけどね」

「嘘じゃないっ?!」

はー。

高梨はようやく笑い止んだ。

「ページを傷付ると傷付くのは記憶なんだよ」

「はあ？」

「この本はアンタの頭なんだよ、智穂。一つ一つのページは想い出なんだ。だから、これが消えて無くなっちゃえば“白羽 智穂”は消えるんだよ」

啞然とする智穂。高梨は優しく笑いかける。

「そうならないために私たちが観察人<ルツカー>はいるんだよ。本の管理は任せてちょうだい」

その頃。

一冊の本が、勝手に書架から落ちた。

本の名は「ガルダ戦記」。

本は黒く光りはじめる。そして、空中に円を基にした複雑な図形 -

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6867j/>

物語の守護人

2010年11月15日08時35分発行